

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌 (XI)

柴 公 也

(41) 台中立志伝

陳四慶 (1911 年生) 龍井公学校卒

私の父は閩南 (*福建省南部の漢族) 系で、二甲歩 (*約二町歩) ほどを耕す自作農でした。ただ、仕事は小作人に任せて専らアヘンを嗜んでおりました。父の時代には、まだ公学校がなかったので学校には通っていませんが、家庭教師を雇って漢籍を学んでいます。母は農家なので纏足をしていませんでしたが、当時の台湾女性の常として文盲でした。父は 67 歳で他界しましたが、母は 100 歳という長寿を全うしています。

私は、この両親の下に台中の郊外の龍井で生まれましたが、誕生日は大正天皇と同じ 8 月 31 日です。十人兄弟の四男で、姉が一人に妹が五人おりました。子供の頃、私は「阿慶」と台湾語の発音で呼ばれていました。兄は三人とも公学校に通いましたが、妹は下から二番目だけが通っただけです。当時は、先生が家々を回って、生徒を勧誘していた時代だったのです。また、女に学問は必要ないというのが世間の常識でした。

当時の龍井は、電気も水道もなく、道路は砂利道で、バスも通っていませんでした。ただ、台車 (*トロッコ) があって、台中に行く時には台車を利用していましたが、私は専ら自転車で往来していました。

私は、9 歳で家から五キロほど離れた大肚公学校に入りましたが、子供の足で一時間以上掛かりました。同級生には 15 歳で入学した者もおりました。私の村からは、男子が三人入りましたが、女子は誰も入りませんでした。

大肚公学校の校舎は、煉瓦造りの平屋でした。クラスは一年から四年までの複式の一つだけでした。生徒は全部で 50 人くらいでしたが、女子は 10 人くらいでした。先生は台湾人で、日本語は台湾語を交えて教えてくれました。ただ、漢文は習いませんでした。

三年になると、歩いて 20 分ぐらいの所に龍井公学校が出来たので、龍井公学校に転校しました。龍井公学校は一クラス 50 人くらいでしたが、高等科はありませんでした。机は四列ありましたが、女子は一列だけでした。先生方は、皆優しく子供たち

を無闇には叩きませんでした。

三年になると、日本語が話せるようになりましたが、学校では日本語、家庭では台湾語という生活でした。当時は、学校で台湾語を使っても別に怒られるようなことはありませんでした。ただ、ある生徒が台湾人の先生の悪口を台湾語で言ったために退学させられたということがありました。

朝会は、毎日ありました。月謝もありましたが、貧しい生徒は免除されていました。制服などは別になく、制帽もありませんでした。カバンもなく皆風呂敷で、靴は履かずに裸足で通っていました。弁当は、蓬莱米ではなく在来米を詰めて持っていました。

私は、勉強が出来た方ですが、特に綴り方が好きで、よく先生から褒められておりました。成績は50人中、常に5番以内に入っていました。級長を務めたことはありません。

五年と六年の先生は九州出身の男の体操の先生でしたが、進学指導には消極的でした。結局、40人くらいの卒業生のうち、中等学校に進んだ者は一人もおりません。卒業生は、ほとんどが農業に従事しました。当時、台湾人には農業の他に適当な働き口がなかったのです。

関東大震災が起きた年の1923年の4月19日、台湾を行啓中の昭和天皇（*当時は摂政の宮）が台中を訪問したことがありました。官民挙げての大歓迎でしたが、奉迎中は顔を挙げてはならないということで、尊顔を拜することは出来ませんでした。

15歳で龍井公学校を卒業し、台中に出て来て、栗原さんという内地人の経営する「海星堂」という薬局で、住み込みの丁稚奉公をすることになりました。仕事は薬の調剤でしたが、月給は3円でした。住み込みだったので給料は安かったのですが、栗原さんには算盤や仕事の厳しさを徹底的に叩き込まれました。私は仕事の厳しさを身に付けたので、その後の仕事をする上で大いに役立ちました。その点では、栗原さんには大変感謝しております。

1928年の5月14日、台湾を訪問していた香淳皇后（*昭和天皇の皇后）の父君である久邇宮邦彦王が台中に立ち寄ったことがあります。久邇宮が台中図書館の前を通り過ぎた際、朝鮮人の趙明河に短刀を投げ付けられるという事件が起き、大騒ぎになってしまいました。いわゆる「台中不敬事件」ですが、犯人はその場で取り押さえられ、死刑を宣告されてしまいました。この事件では、総督や知事が責任を取る形で辞任しています。

19歳で、「海星堂」を辞め、内地人の五場さんの下で医療器具のセールスを始めました。月給は30円でしたが、食事代として12円を差し引かれました。

22歳の時に、生活していく自信が出来たので結婚することにしました。妻は台中の人で、私と同年でしたが、纏足はしておりません。実は、妻は9歳の時に私の

家の養女になりましたが、公学校には通わず母の手伝いをしていました。いわゆるシンブーア(*媳婦仔)でしたが、当時の台湾では、別に珍しくない結婚でした。幸い、私たち夫婦は相性が良かったのか、二男五女に恵まれ、妻が 86 歳で亡くなるまで円満に過ごしています。

子供たちは、全員大学を卒業しています。長男は社長に、次男は医者になって病院を建てています。孫たちの中にも、国際企業の会長になっている者もあり、また、アメリカに留学して医学博士になった者もいます。

23 歳になってからはセールスを止め、内地人の杉山さんの経営する医療器具の代理店で働き始めました。その頃、仕事で初めて内地に行きました。基隆から神戸まで、二泊三日掛かりました。さらに、神戸から特急で 9 時間ほど掛かって東京に着きました。関東大震災から完全に復興した東京には壮麗な建物が立ち並び、さすが帝国の首都といった威容を誇っておりました。

大東亜戦争が始まる前に医療器具店を止め、南部の屏東の近くの潮州にある台湾人経営の織物会社の工場長を務めることになりました。それが、戦争が始まって空襲が始まり、工場が爆撃されて破壊されてしまいました。それで、工場が台中に移り、終戦後の 1953 年まで工場長を務めておりました。いずれの仕事も内地人とは揉め事を起こすことなく、仲良く付き合っていました。

私は、年齢が徴兵の期限を過ぎていましたので、軍隊には行っておりません。当時は自分のことを日本人と思っていたので、敗戦の知らせには悲しくて涙を抑えきれませんでした。1947 年の二二八事件の際には、別に抗議活動に加わらなかったのも、国民党から迫害されるようなことはありませんでした。

1953 年になって、妻の兄と一緒に台中で小麦粉の製粉会社を立ち上げました。社長は妻の兄に任せ、私は勝手の知っている工場長に就きました。月給は 3 万元でした。製粉工場の工場長は 1983 年まで 30 年間務めました。会社は 1993 年に 83 歳で退職しました。退職金として 300 万元受け取りました。

公学校卒の資格しかない自分が、二つの会社で工場長を 40 年以上も大過なく務め、7 人の子供たち全員を大学に通わせたのですから、幸福な人生だったと思っています。苦労を共にした妻も満足して先に逝ったと思います。今でも、月に二回は妻の好きだった花を携えて墓に詣で、菩提を弔っております。

私は写真と旅行が好きで、妻と一緒に北米や南米、欧州や中国など 70 回以上世界を回っています。日本には、20 回以上行きました。沖縄から北海道まで全国を訪れましたが、特に温泉が好きで草津や別府には何度も行っています。百歳を迎えた年にも日本に行きましたが、東京と福島の間を回って来ました。たまたま、東日本大震災の前年でしたが、旅行には何の支障もありませんでした。

私は地震の災厄とは無縁の運勢なのか、死者三千人以上を出した 1935 年の新竹・

台中大地震（＊マグニチュード7.1）の時にも、偶然台南に出張していたので難を逃れています。また、死者二千五百人近くを出した1999年の台湾中部大地震（＊マグニチュード7.6）の際にも、花蓮に旅行中でしたので、震災には遭いませんでした。

私は、若い時は体が弱かったのですが、47歳から毎朝太極拳を始め、同時に散歩も欠かさないようにしました。仕事を辞めてからは、毎朝4時半には起床して運動をし、昼は一時間ほど昼寝をし、夜は8時半には就寝するという日課を守っています。

歯は全部入れ歯になってしまいましたが、朝は御粥と卵と梅干、昼は麺類、夜は御粥とスープと肉・魚・野菜を適当に摂り、腹七分目を守っています。酒は宴会の時だけ少し嗜む程度で、普段は飲みません。タバコは医療器のセールスをしていた時は吸っていましたが、セールスを止めてからは一切呑みません。ちなみに、私の身長は163センチで体重は48キロです。

妻は86歳で先に逝ってしまいましたが、妻の看病中から書き始めた日記は、頭の老化防止を兼ねて現在まで一日も休まずに書き続けています。今年で、私も105歳を超えてしまい、台中市では男子の最高齢者の一人になってしまいました。まだ目も耳も脚も達者なので、体調が良かったら子供たちと一緒に日本を訪れ、もう一度ゆっくり温泉に浸かってみたいと思っております。

（42）級友の情け

三井勝美（1927年生）台北経済専門学校

私の父は、阿蘇の高森の出身ですが、小学校しか出ていません。台湾に渡り、花蓮港の近くの製糖所の事務所に勤めておりました。その後、花蓮港木材という台湾檜を扱う会社に移りました。関東大震災で、東京の木材の需要が伸びたので、父は東京に転勤になりましたが、その時私はこの世に生を享けたのです。その後東京での仕事が一段落して、父は花蓮港に戻りました。私が四歳の時でした。花蓮港は、中心街は舗装され、内地の地方都市よりはインフラが整備されておりました。

実際、私が終戦後に山口高商に進んだ時、戦災を受けなかった山口の街は中心街でも舗装されておらず、明治時代のままでした。

戦争末期の昭和18年、花蓮港中学の五年の夏休みに、飛行場整備に動員されたことがありました。木陰一つない草原にいと、汗が吹き出る間もなく、蒸発して塩粒になり、「お前、専売局に捕まるぞ」と冗談を言い合っておりました。

作業は、排水溝の整備でしたから、まだ何とかしのげましたが、昼飯の後で草の上に座っていると、体が熱い太陽に焼かれているような感じがしました。誰かが「オイ、相撲取るぞ！」と立ち上がりました。皆一斉に立ち上がり、相手構わず投げたり投げ

られたりしておりました。こうして一気に汗を出したほうがすっきりするのです。

こんな生徒の気持ちを知ってか知らずか、先生たちは生徒が作業中、テントの中でお茶を飲み、退屈するとたまに出て来て、「いい加減な仕事をするなよ」と注意して戻っていただけでした。

そんな中、ただ一つの楽しみは、帰りに S 君の家に寄り、アイスクャンディーを嘗めながらレコードを聴くことだけでした。彼とは日本に引揚後、学校こそ違いましたが、偶然にも同じ県で学生として再会し、卒業後も友情は続きました。いつか同窓会で「君を見てホットしたよ」と言ったのを覚えております。その彼も台湾の母校訪問を固く約束しながら、果たせぬままこの世を去ってしまいましたが、夏休みになると決まって彼のことを思い出すのです。

戦争も末期の昭和 19 年の頃、台北経済専門学校一年の冬休み、台湾北部の炭鉱に動員されました。坑口から貯炭場までトラックに満載した石炭を運ぶ仕事でしたが、雨が多く、蓑笠姿で作業に当たっておりました。途中で急傾斜、急カーブがあって大変危険な仕事でした。

唯一つ救いだったのは、引率の教授たちの温情でした。お昼になると、「ご苦労様」とねぎらってくれ、お茶を出したり背中を拭いたりしてくれました。大人たちからそんな丁寧な扱いを受けたのは初めてでした。教授たちの態度は中学時代の先生たちのそれとは余りに対照的で、その時、教養とはどんなものであるのかを知らされ、改めて教授たちを尊敬するようになりました。

大東亜戦争前後に、台北で過ごした学生時代の友人たちのことは今でも忘れられません。終戦は、台北経済専門学校（*旧台北高等商業学校）二年の時でした。日本の統治下に置かれていた台湾では、終戦を境に日本人と台湾人の立場が逆転しました。それまで差別的な言動を受けていた一部の台湾人学生が集団で日本人学生を襲ったことがありました。止めに入った私も暴行されそうになりましたが、台湾人の同級生が「俺の友達だ。止めろ」と言って助けてくれたのです。私が日本に引揚げた後も、彼が亡くなるまで毎年のように会って旧交を温め続けたのでした。学校で学んだことは、ほとんど忘れましたが、友情は私が生きている限りずっと続くのです。

(43) 台南二中の頃

蘇楠榮 (1928 年生) 台南二中；台北高校

父は六歳で孤児になり、従兄弟たちとバラックのような小屋に住み、貧困の中で育ったそうです。書房にも通えませんでしたから、全くの無学で文盲でした。母も当時の台湾女性の常として、文盲でした。当然、日本語は全然出来ませんでした。

初め、父は粗末な店を出して、飴玉や学用品を売っていたそうです。次いで、大工

の下働きに従事していたとのこと。そのうち技術を習得して、大工になったのだそうです。善化街の武徳殿も父が建てました。当時住んでいた煉瓦造りの家も父が建てたものです。

父は、善化街に住んでいた地主の農地の小作人もしていましたが、勤勉で正直だったので、地主が台南に移る際に、農地の管理を任されたとのこと。それで、100甲歩の土地の管理人となり、小作人たちの監督をして管理費を受け取っていたそうです。

私は、この両親の下で1928年に善化で生を享けました。公学校は、茄菽公学校に入学しましたが、実は学齢よりも一年早く入学しています。当時は、近くに幼稚園もなかったため、一年早く就学させたのでしょうが、学校は別に問題にしませんでした。

茄菽公学校の先生方は、たいいてい師範学校を出た台湾人の先生でした。式日には、官服を着てサーベルを手にしていました。一年の時から日本語を勉強しましたが、台湾語を交えて教えてくれました。二年生頃からは、ほとんど日本語だけで教わりました。三年生頃からは、休み時間でも日本語を使うようになっておりました。

公学校入学までは、両親とも私を台湾語の漢字音で呼んでいましたが、公学校に入ると、父だけは日本語の漢字音で呼ぶようになりました。学校では先生だけではなく、級友たちも日本語の漢字音で呼び合っておりました。

四年生に上がる時、「茄菽公学校では程度が低いから中学に入れな。四年から善化街の公学校に移れ」という父の言葉に従って、善化公学校に転校しました。両親は自分たちが学校に通えなかっただけに、子供たちの教育には大変熱心でした。

善化公学校は、1・2組が男子組で、3組が女子組でした。また、二年制の高等科もありました。四年生頃になると、休み時間に台湾語を使うと叱られるようになりました。私は優等生でしたので、叱られたことはありません。

私が三年生の頃、父は山の隠れ家に行って博打をしていましたが、警察に捕まって留置場に一週間ほど入っていたことがありました。その際、私が弁当を持って差し入れに行った記憶があります。父に前科が出来たので、本来ならば、私は中学校の受験資格はなかったのですが、警察課長の山本さんをお願いし、前科を消してもらって中学を受験できたのでした。父は困っている人がいると、助けずにはいられない侠客気質があって、日本語は出来なかったのですが、どういう訳か警察課長の山本さんとは馬が合って親しくしていたのです。山本さんは人格者で、台湾人を苛めたりはしませんでした。

山本さんは、その後、安定庄の庄長を務めましたが、空襲が激しくなると、山本さんの家族が私の田舎の家に疎開して来ました。ただ、残念なことに、疎開中に奥さんが亡くなってしまいました。山本さんが日本に引き揚げる時、父は駅まで荷物を運んで見送りました。

昔の台湾の警察は威張っている人が多かったのですが、それでも中学生には、選ばれた人たちだということでむやみに怒鳴りつけたりせず、一目置いておりました。

公学校の課程を終えて卒業することになったのですが、学齢よりも一年早く入学したため、私には上級学校の受験資格がありませんでした。それで、もう一回六年生のクラスに入り直し、後輩たちと机を並べて勉強することになりました。

二回目の六年生の時、男子組だった私のクラスに女の子が 25 名ぐらい新たに加わりました。担任の先生が受験指導の名人ということで、女学校を目指す生徒が入ってきたのです。また、他の公学校からの転校生もいましたから、私のクラスは 70 名を超えておりました。ただ、男女の席は左右に分かれておりました。

昭和 15 年の二回目の六年生の三学期の時、善化街の公学校の国語演習会がありました。15～6 名が参加して、題目の書かれた籤を引いて 15 分ほど話をするというものでした。私の演題は「紀元二千六百年」というものでした。私は無事上がらずに話を終えて、一等になりました。次は、新化郡の大会に出ましたが、演題は「国語」でした。これも難なくこなして、やはり一等を取りました。今度は、台南州の大会に出ましたが、「防空演習」という演題を引いてしまいました。この演題では上手い話が思い付かず、結局台北での全島大会には参加できませんでした。

また、私は二回目の六年生の時、級長を務めました。副級長が二人いて一人は女子でした。当時は、同じクラスでも男の生徒と女の生徒は話をしませんでした。どうした訳か私がこの女子副級長のことが好きだという噂が立ちました。実際には、別に好きではなかったのですが、副級長の方は本気にしていたらしかったのです。

終戦後、私は台北高校に通っていましたが、台北から帰ってきた時、その女性が後輩の女子生徒に私宛の手紙を持たせてきたのでした。何でも「台南で一緒に映画を見ましょう」というものでした。つれなく断るのも悪いと思い、招待を受けて一緒に映画を見ました。その後は私の方からは連絡しませんでしたから、今思えば罪なことをしたと思っております。

善化公学校を卒業して、台南二中を受験し、幸いにも合格しました。台南二中は台湾人の学校ですが、一割ぐらい内地人も入学していました。内地人の生徒は少数でしたのでおとなしく、別に苛めたり喧嘩したりはしませんでした。ただ、先生方は、ほとんどが高等師範や大学を出た内地人の先生でした。

同級生とは喧嘩しませんでした。他校の生徒とは、時に喧嘩することがありました。ある日、同級生と街を歩いていると、一中の生徒が向こうから歩いてきました。すると、二人は互いに敬礼をしてすれ違ったのでした。「なんで一中の生徒に敬礼したんだ」と聞くと、「喧嘩して友達になったんだ」とのことでした。中学校時代は、相手が内地人だから喧嘩していたわけではなく、相手が生意気でむかついたりした時など喧嘩しておりました。

また、先輩にはなんでもないことで難癖を付けられて銃器庫の裏に呼び出され、「お前、敬礼した時俺の目を見なかったな」とか「お前の帽子が曲がっていた」などと、いちゃもんを付けられて気合を入れられていました。ただ、校外で気合を入れられるということはありません。

一度、台南高等工業学校に通っていた台南二中の先輩が内地人の学生から、生意気だということで袋叩きにされるという噂が流れたことがありました。この噂に激高した台南二中の生徒が、台南高工の内地人の学生と台南駅の近くで集団の殴り合いの喧嘩をすることになったのです。

生徒たちが台南高工の学生たちと喧嘩するという噂を聞き付けた、台南二中の内地人の屈強の三人の先生方が後を付けてきて、喧嘩を止めるどころか、生徒たちに加勢して先頭に立って取っ組み合いの喧嘩をしたのです。先生方は、眼鏡を飛ばされたり、服を引き裂かれたりしましたが、懸命に教え子たちを庇ってくれたのです。

最後には、憲兵が駆けつけて仲裁に入り、ガード下で点呼を受けましたが、台南二中は300人、台南高工は100人が参加した大立ち回りは、翌日の新聞にも大きく報道されたのでした。

二中の一年の時、台南第二高女を出て、東京の昭和薬学専門学校に通っていた四歳年上の姉の発案で、一家揃って改姓名を申請することになりました。私は「梶山正人(すぎやま まさと)」と改姓名したのですが、両親が日本語が出来ないということで通らず、終戦まで台湾名で通しました。

当時、台湾は植民地で、私たちは二等国民でしたが、それでも内地人には負けてたまるかと思っておりました。ただ、独立や支那への復帰などは考えたこともありません。同級生の中には、支那が祖国だと思っている者も何人かいたようですが、私は内地人に苛められたことはなかったので、支那が祖国だという考えを持っていなかったのです。

確かに内地人とは違うが、それでも日本人だと思っていたのです。矛盾するようですが、沖縄の人と本土の人との関係を思い浮かべてもらえば、ある程度理解してもらえるのではないかと思います。

朝鮮では、中学校で天皇に忠誠を誓う「皇国臣民の誓詞」というのを唱えていたようですが、二中では「軍人勅諭」は唱えていましたが、「皇国臣民の誓詞」は唱えたことはありません。当時、私たちは自分たちのことを日本人だと思っていましたから、そのようなことを一々言う必要はなかったのです。

台南二中を卒業して、台北高校を受けることにしました。当時、高校受験は受かる確率は低いですが、4年生から受けることが出来ました。大体の人は4年生では受からず、5年生で再度受験する人が多かったのです。

私は幸運にも4年生で受かりました。体操や作業、それと教練や操行などの成績

はそれほど振るいませんでしたが、これらを除いた学科の成績ではトップだったのです。

台北高校は、軍国主義の台南二中とは違って自由主義でしたので、台湾人だからといって苛められたりはしませんでした。内地人の学生同士でも、台湾の植民政策を堂々と批判していたのです。

終戦の報に接した時は、台湾はどうなるのかと思われて、涙が止まりませんでした。それでも、何週間か過ぎると、国民党の宣伝に乗せられて、これで祖国に還るのだと思うようになって自然に嬉しくなってきました。しかし、その期待も国民党のみずぼらしい軍隊を目の当たりにして潰えてしまったのです。

(44) 家政女学校の頃

李栄子 (1929 年生) 台中家政女学校卒

私の先祖は福建省の漳州の出身で、曾祖父の代に台湾に渡って来たそうです。祖父は、大陸に渡って科挙の試験を受け、「秀才」の称号を持っていました。祖父は、台中州の草屯に田畑を有する地主でした。祖母は纏足をしていたので、まともに歩けませんでした。

地主の三男に生まれた父は、台中一中を卒業してから内地に渡り、青山学院を出て明治大学の法科を卒業しております。東京では、下宿をしていましたが、その下宿の大家さんと母は親戚でしたので、母がその下宿屋に遊びに行った時に父と知り合ったのです。母は東京生まれで、奥田裁縫学校を出ていましたが、民族の壁を越えて父と結婚したのだそうです。明大在学中に結婚して、三歳上の兄が生まれ、続いて私と二つ下の妹が生まれました。

私が五歳頃に台湾に帰って来た時は、まだ家がありませんでした。それで、家が建つまで、内地の医学校を出て医者をしていた叔父の家に厄介になりました。叔父は、なかなか子供が出来なかったので、奥さんを四人娶っていました。

父は三男でしたが、祖父から財産を分けてもらい、西洋式の家を建てました。家では、皆日本語で話していたので、私は終戦まで台湾語が出来ませんでした。

父は、生ゴムの事業を始めて、よく蘭印 (*現在のインドネシア) に行っておりました。家の近くに生ゴムの工場も建てて事業は順調に行っていたのですが、大東亜戦争が始まって工場が軍需工場に転用されたので生ゴムの仕事は止めてしまいました。

私は、内地人と同様に日本語が出来たので、幼稚園には通わずに草屯小学校に入学しました。草屯小学校は複式の小さな学校で、二学年一クラスで 30 人ぐらいが在籍していました。先生方は皆内地人でしたが、同じクラスに台湾人の女の子が三人、男の子が五人おりました。四年の時は、台中師範を出た女の先生でした。五年と六年は

男の先生でしたが、手芸は女の先生でした。先生方は皆優しい先生でした。

土曜や日曜には、同級生が私の家に遊びに来て、ブランコやシーソー、それと家で飼っていた動物たちと戯れておりました。同級生は18人ぐらいいましたが、全員上級学校に進んでいます。

私は対人恐怖症気味でしたので、学校では大変おとなしくしておりました。それで、男の子からはよく苛められました。台湾人だからというのではなく、私が苛められっ子だから苛められたのです。ただ、女の子からは苛められたことはありません。

女の同級生は、皆高等女学校（＊四年制）への進学を希望しておりました。私も高等女学校に行きたかったのですが、母に「あなたは長女だから家政女学校（＊三年制）にきなさい」と言われ、泣く泣く台中家政女学校に入ったのです。妹は五人いましたが、末の妹も家政女学校に入っています。

家政女学校は、一学年二クラスで、一クラス50人ぐらいいました。台湾人と内地人は半々でした。別に喧嘩もせず仲良く過ごしておりました。ただ、態度が悪いと、先輩に校庭の隅に呼ばれて説教されました。

制服は、冬はセーラー服にネクタイを締めていました。4月1日に衣替えがあり、夏は半袖の白いシャツでした。一年はスカートでしたが、二年からはモンペに変わってしまいました。靴は、二年頃から二、三人だけに配給があり、あとは下駄を履いていました。それでも正月には和服を着て羽根つきをしておりました。

髪型は、一年生はオカッパで分けて止め、二年は後ろで一つか二つに縛り、三年は三つ編みにして下げていましたから、一目で学年が判りました。スカートは背丈に関係なく、床から一尺と決められていましたから、並ぶとスカートの裾の線が綺麗に揃って見えました。ただ、それも一年だけで、二年からはモンペになってしまいました。

先生は優しい先生が多かったのですが、校長が厳しくて行進の訓練をよくやらされました。なぎなたの稽古もやりましたが、銃などはさすがにやりませんでした。他にも、陸軍病院に行って包帯を巻いたり、軍の飛行場に行って、擬装用の網を編んで飛行機に被せる作業をやらされました。

作業や体操の時はブルマーでしたが、式日や旗行列の時はスカートでした。教育勅語は、校長室に置いてありましたから、校長室の前を通る時は、何時も頭を下げ通っておりました。

学校では、毎日朝礼がありました。まず国旗掲揚をしながら君が代を歌い、次に宮城遥拝をしてラジオ体操で終わりました。月曜日には、講堂で校長の訓話がありましたが、講堂の板の間に正座させられ、一時間の長話を聞かされました。

授業は、国語、地理、歴史、理科、体操、美術、唱歌などがありましたが、唱歌の授業では軍歌だけ習い、「婦人従軍歌」や「若鷺の歌」などを歌っていました。音符もドレミではなく、イロハで習いました。アメリカと戦争をしていたので、英語はあ

りませんでした。また、刺繍、手芸、裁縫などもやりましたが、戦争中でしたので、夏休みも短縮されて奉仕作業に動員されました。

若い先生は、皆出征していきましたので、年を取った先生に農業を教わって野菜造りをしていました。ただ、料理は厨房の設備がなかったので出来ませんでした。先生方は厳しい先生が多かったのですが、叩かれるようなことはありませんでした。

終戦後、母は日本に戻ることを諦めて中華民国の国籍を取ることにし、名前も「李菊」と改めました。そのため、日本との断交後、日本に帰る際に大変苦勞しました。父は、55歳で亡くなりましたが、母は日本に帰らず、台湾に骨を埋めました。私は、国籍は中華民国で、現在は台北に暮らしていますが、心は今でも日本人と思っております。

(45) 峡谷の残照

柯正信(*民族名:タリ・カギ) (1932年生) 天狗蕃童教育所;象鼻国民学校卒

私はタイヤル族の頭目の家系で、新竹州の大湖郡の山峡の天狗部落で生まれました。天狗部落は、戸数三十戸ぐらいのタイヤル族の村でした。

タイヤル族は、男は額と顎に、女は額と頬に刺青を入れる習慣がありました。昔、男は首を狩らないと刺青を入れられませんでした。自分で狩らなくても誰かが首を狩って来た時に、形式的に首を買い入れて刺青を入れておりました。

女は、刺青を入れないとタイヤル族の男とは結婚できず、漢族と結婚するほかなかったそうです。また、刺青は濃いほど美人だとされていました。ただ、施術には大変な苦痛を伴い、傷が治るまでは家に籠もって外には出なかったそうです。

また、男は上の側切歯か犬歯を抜いていました。父に、「なぜ歯を抜くのか」と尋ねたことがあります。父は「話をしている時、白い歯の間から赤い舌先が覗くと格好が良くて男前に見えるからだ」と語っておりました。私も子供の頃は、刺青は周りの大人たちがしているので、入れても構わないと思っていましたが、歯を抜くのは大変痛そうなので嫌でした。

私の両親も顔に刺青をしていて、学校には通っておりませんでした。当時は、先住民のための学校がなかったのです。後に、教育所に設けられた国語講習のための夜学会で日本語を習ったので、少しは日本語が話せました。ただ、台湾語や北京語は出来ませんでした。その頃は、刺青をしていると教育所には通えず、夜学会で日本語を習うしかありませんでした。ちなみに父は91歳、母も82歳の当時としては長寿を全うしております。

兄弟は、八人でしたが、夭折して三人だけが残りました。10歳上の姉は、刺青を入れましたが、後で父と姉が警察に「なぜ刺青を入れたんだ」と叱られたそうです。

姉は教育所には通わず、夜学会で日本語を勉強しておりました。母は、着物を着ませんでしたでしたが、姉は、駐在所に踊りを習いに行く時、着物を着て下駄を履いておりました。姉は、結婚の時も、和服を着て白足袋に下駄を履いていました。駐在所に内地人の大工さんがいましたが、その人が下駄を作っていたのです。姉婿は背広で、脚にはゲートルを巻いて地下足袋を履いておりました。

姉と同世代のタイヤル族の女の人は、普段から着物を着ておりました。着物は、別に強制されたわけではなく、自分で布を買って来て、自分で縫って着ていたのです。同世代の男の人は、国民服を着て脚にはゲートルを巻いていました。

私は、満七歳で天狗教育所（*本科四年；補習科二年）に入って、1945年に象鼻国民学校を卒業しています。天狗教育所は先住民の学校で、校舎は平屋の木造でした。壁や天井は松の板でしたが、板目の模様が浮き出ている見事なものでした。床は、コンクリートでしたが、屋根は雨が漏らないように、竹を二つに割って交互に重ねたものでした。黒板も大きくて教壇も立派なものでした。

生徒は全校で40人ぐらいで、男女の比率は半々でした。中に、一人か二人、山地で働いていた漢族の子弟も通っておりました。ただ、内地人の子弟はおらず、他の所の小学校に通っていました。

山地教育所は、教育課ではなく理蕃課の管轄ですから、校長先生はおらず、教育担当の警官とタイヤル族の警丁が先生として教えておりました。先生方は、警察官ですが、師範学校を出て警察官になっている先生もおりました。ただ、教育所で教える場合は、警官の制服ではなく、背広を着ていました。奥さん方も教えていましたが、竹で子供たちの手の平をよく叩いておりました。

教室は本科に一つと補習科に一つの二教室ありました。校庭もありましたが、狭いものでした。一応、一年、二年、三年、四年とクラスは分けていましたが、複式で全員一つの教室で勉強しておりました。

教科書は、教育所用のもので、公学校のものよりはやさしいものでした。日本語は一年から勉強して二年に上がる頃には話せるようになっておりました。三年では、九九を習いましたが、なかなか覚えられず、夜でも眠いのを我慢しながら練習して、なんとか一週間ぐらいで覚えました。

教育勅語も全部覚えました。一人で歩いている時でも、友達に話し掛けるような感じで、呟いていたのです。教育勅語は人の守るべき道を説いているので、終戦後でも時折唱えておりましたから、今でも全部暗誦できます。

朝会は、毎日ではなく、一週間に一回でした。最敬礼して宮城遥拝もしていましたし、天長節などの式日には、先生の奥さんから餅をもらっておりました。

教育所では、月謝はもちろん教科書や文房具も全部無料でしたから、部落の子供で教育所に行かなかった者はおりません。もし、子供が無断で欠席すると先生がわざわざ

ぞ訪ねて行って、学校に来るようにと説得していたのです。

当時の服装は、麻で織った貫頭衣のようなものを年中着ていて、腰の周りには帯の代わりに蔦を巻いて結んでいました。ただ、比較的裕福な家の子供の中には、粗末な着物を着て来る者もありました。靴はなく裸足で通っていました。弁当は焼いたサツマイモやサトイモを蔦で編んだ袋に入れて持って行きました。

内地人の先生は、一年ごとに交代していましたが、皆優しくて悪いことをしなければむやみに叩くようなことはありませんでした。ちなみに、私は先生に叩かれたことはありません。私は優等生で、三年、四年、それと補習科の一年との合同での国語の問題で、一番になったこともあります。

教育所では、運動会や学芸会も開いておりました。運動会は、象鼻教育所に集まって連合で開催していました。親たちは運動会を楽しみにしていて、米のご飯や餅といろんなおかずを持ってきてお祭り気分でした。教育所だけではなく、部落の運動会もありましたが、教育所に劣らず、楽しいものでした。

学芸会も開催していましたが、「猿蟹合戦」や「姥捨て山」などの劇や唱歌を歌っておりました。運動会と同じで、親がご馳走を作って持ってきておりました。運動会や学芸会では賞品が出ましたが、鍬、鎌、鍋、皿、茶碗、バケツなどの生活用品でした。また、駐在所から菓子や酒の差し入れがあり、皆に配っていました。山地には、これと言った娯楽がありませんから、皆運動会や学芸会を大変楽しみにしておりました。

昭和 17 年に、三つの教育所が統合されて象鼻国民学校になりました。校舎は、平屋で屋根は竹で葺いていました。床はコンクリートでしたが、壁や天井は檜でした。校庭は 100 メートルの直線のトラックと一周 200 メートルのトラックがありました。講堂はありませんでしたが、広い廊下を雨天体操場にしていました。

全体で 200 人ほど在籍していましたが、私のクラスは 38 人で、男女一緒でした。ただし、男女の席は左右に分かれていました。私は、父に可愛がられていましたから、父に買ってもらった靴を履いて通っていましたが、他の子供はたいてい裸足でした。

もう教育所ではありませんから警察部長の校長先生もいましたし、三十代の既婚の女の先生も二人いましたが、全員内地人でした。象鼻国民学校では、三年間勉強しましたが、複式の学校ではなかったので、学年ごとに担任の先生がおりました。

科目も、国語や算術、修身だけではなく、地理、歴史、理科、唱歌、図画、体操などがありました。教科書は、教育所用のものではなく、内地人と同じ国民学校用のものを使いましたが、ただ国語と算術は内地人の国民学校よりは一学年下の教科書で勉強していました。教科書や文房具は、教育所と同じで全然金は掛かりませんでした。教科書は、机の中に入れて帰りましたが、鉛筆だけは家に持ち帰っていました。

私は、象鼻国民学校でも優等生だったのですが、卒業の前に一ヶ月ほど病気で休ん

でしまい、二等になったので優等賞はもらえませんでした。

天狗教育所では、休み時間にタイヤル語を使っても怒られませんでした。象鼻国民学校では、タイヤル語を使ったのが先生に知られると、罰として、「ばんじん」と書かれた大きな札を首に下げさせられました。

服は大体伝統的な民族服でした。弁当は籐の蔓で編んだ箱にご飯を詰めて持っていきましたが、芋を持ってくる者もありました。おかずは魚や肉でした。

四年の時、大湖神社が落成したので、その式典に参加するため、先生に引率されて象鼻から大湖まで八時間かけて歩いて行ったことがあります。弁当を持って行くのですが、日帰りは無理でしたので、途中で農家の畑の番小屋を借りて雑魚寝をした思い出があります。

象鼻国民学校でも、もちろん朝会や運動会はありました。運動会は天狗教育所よりも盛大でしたが、賞品はノートやタオル・石鹸などで、戦争の影響もあって、天狗教育所時代よりも価値の劣る物でした。

当時の遊びは、川遊びや川原に土俵を造って相撲を取ったりしていました。先生方は、たいてい相撲が好きで強かったのですが、中には剣道二段、柔道二段の猛者の先生もありました。また、柔らかいボールを使って野球の真似事などもしてありました。サッカーや柔道はやりませんでした。剣道は、学校に防具が揃えてあったので、それを身に付けて稽古に励んでおりました。私は本を読むのが好きで、学校から借りてきた本を松明の灯りで読んでおりました。

昔の象鼻のタイヤル族の家は、二つに割った竹の節を取り、交互に向かい合わせて壁にし、また同じ方法で屋根も葺いておりました。家の中央には囲炉裏が切っており、三つの石を置いて竈にし、隙間から薪を焚いていました。部屋の四隅に竹の寝台が置かれておりました。山地の冬は冷えるので、竹の寝台の下に炭火を撒いて寝るのですが、熱すぎると眠れず、消えると寒くて大変でした。

タイヤル族には、死者を家の中に葬るという習慣がありました。死者が家族を護ってくれるという考えから先祖伝来行われてきたのです。実際、祖父がなくなった時、私の寝台の下に墓穴を掘り、祖父に着物を着せて銃や刀など好きな物を持たせ、立て膝で東に向けて座らせたまま埋葬したのです。祖父の回りの空間は、葉や着物、毛布などで満たし、穴の上は、板を敷いて木の葉を被せ、50センチほどの土で覆ったのです。

ですから、私はそれ以来祖父の遺体の上で寝起きしていたわけですが、全然怖くはなく、かえて祖父に護られているという安心感がありました。二、三年経つと、焼畑の土地が瘠せるので、他の所に引っ越すのですが、墓はそのまましておくのが習慣でした。この習慣は、終戦後国民党の時代になるまで続きました。

炊事道具は銅製の鍋が一つあるだけでした。食器も茶碗などはなく、小さいしゃも

じを使って鍋から直接掬って食べていました。主食は芋類や粟でした。また、畑で野菜を作り、山で猪や鹿を狩り、川で魚を捕っていましたから、野菜や肉や魚にも不自由しませんでした。腹が空いた時は、バナナなどをおやつにしておりました。

風呂などはありませんから川で水浴びしていました。偶然下の川に温泉が湧いたので、先生に連れられて川辺の温泉に入っていました。

生活用水は、太い真竹の節を抜いて作った筒で近くの谷川の水を汲んで来て使っていました。大人は三本を束ねて背中に負っていましたが、子供は一本だけで運んでいました。

山地では、元々便所はなく、人目に付かぬ所で済ましていたのですが、内地人に教えられてからは、便所を作って用を足すようになりました。

農地は焼畑だったので、二、三年で耕作地を替え、山の斜面を転々として畑を作っていました。水田は焼畑と違って、手入れさえすれば何年でも米が作れるというので、内地人に教わり、川辺のいい場所を選んで水稻を栽培するようになりました。田植えや草取りの時は、先生方の奥さんたちが手弁当で手伝いに来てくれました。また、黄牛や水牛を使って耕作する方法や、堆肥の作り方も教わりました。山地では、元々焼畑で陸稲の糯米を栽培していましたが、それで酒や餅を作っていたのです。

タイヤル族の家では、狩猟に必要ですので何頭か狩猟犬を飼っていました。私の家にも、何時も5~6頭の犬がいて、子供の頃から犬と戯れておりました。猫も飼っていましたが、これは貯蔵している穀物を鼠から守るためでした。

タイヤル族は、山地の畑仕事だけでは現金収入がなかったので、道路工事などがあると喜んで働いておりました。営林署で一日働くと80銭ぐらいにはなりましたから、結構良い稼ぎになっておりました。

私の民族名は、「タリ・カギ (*タリが個人名でカギは父の名前)」ですが、三年生の時に先生から日本名を付けてもらい、それ以後は「平野行雄 (ひらのゆきお)」と名乗るようになりました。この時、教育所の全員が日本名を名乗るようになったのです。それ以来、教育所ではお互いに日本名で呼ぶようになり、私は先生や友達からは「行雄」と呼ばれるようになりました。ただ、家や近所の人たちの間では民族名の「タリ」で呼ばれておりました。名前が日本名に変わったことについては、子供でしたから特別な感慨はありませんでした。ただ、部落の老人たちとは今でもタイヤル語で話していますが、今でも「タリ」と呼ばれています。

当時は、自分のことを日本人だと信じて疑いませんでした。確かに内地人とは違いますが、自分もタイヤル族の日本人と思い込んでいたのです。

現在の漢族名の「柯正信」に変えたのは国民党の時代になってからで、私が18歳の頃のことでした。ただ、昔の教育所の友人たちからは今でも「ゆきお」と呼ばれています。二年前に他界した二歳年上の妻 (*芳賀より子) とともに日本名で呼び合っ

ておりました。ちなみに妻は、清安教育所を卒業していてカトリックの教会に通っていましたが、私は昔からの祖先崇拜の教えを守っています。

山地には部落ごとに駐在所があり、教育、衛生、医療、建築などを担当する警官が5～6名配置されていました。内地人の警官よりもタイヤル族の警丁の方が威張っていて、よく同族の人たちを殴っていました。

昭和20年の3月に、象鼻国民学校を卒業しました。男の同級生たちは全員国民練成所に入所させられましたが、私は年齢が足りなかったので入れませんでした。

卒業の時、担任の先生から、「そのうち新竹の中学校に推薦してやるから待っている」と言われたので、家で山仕事を手伝いながら本ばかり読んでおりました。当時、先住民の子供で成績優秀な者は、推薦で中等学校や師範学校に入っていたのです。実際、タイヤル族で汶水教育所を首席で卒業した者が宜蘭農林学校に入学しています。

家で待っているうちに終戦の報に接することになりました。日本が負けるとは思っていなかったもので、残念で涙を禁じ得ませんでした。南海の島に虚しく散った同族のことを思って泣いたのです。

私の部落から高砂義勇隊に入って、ニューギニアに行った者が七人いましたが、無事還ってきたのは二人だけでした。タイヤル族は尚武の民でしたので、日本軍の凛々しい姿に憧れて高砂義勇隊に志願した者が多かったのです。南洋から無事帰還した人が、「二十年後に、日本はまた来ますから待ちましょう。楽しみにして待ちましょう」と語っていたことが思い出されます。

終戦後、内地人の先生方は全員日本に引き揚げてしまい、新竹中学への進学之梦も儚く消えてしまいました。その後は、山地で農業を続け、柿や梅などの温帯性の果樹栽培で生計を立てて来ました。

日本時代は、物質的には大変貧しい時代でしたが、精神的には豊かな時代だったと思います。私は、今でも日本時代が懐かしく、日本人の先生たちの教えを心の指針にして生きております。

〈続〉